

英語における「内容節を伴って現れる名詞句」と冠詞の関連について

著者	板垣 完一
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	2
ページ	67-77
発行年	1994-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34415

英語における「内容節を伴って現れる名詞句」 と冠詞の関連について

板 垣 完 一

はじめに

英語の冠詞は、そのような文法範疇を持たない言語を母国語とするものにとりわけ、その使用法が複雑多岐で、書くにしろ話すにしろ適切な言語コミュニケーションをはかろうとすると、多くの困難な問題を引き起こしている。本稿は、問題領域を、(1)のような「内容節⁽¹⁾」を伴って現れる名詞句」に限定し、冠詞の適切な使用に関わる問題の一端を論じてみたい。

- (1)a. the fact that the dog barked during the night⁽²⁾
- b. the rumour that the Prime Minister is going to resign

1. 問 題

まずはじめに、問題の所在を確認する。本稿で扱うのは、具体的には、冠詞＋主要部名詞＋内容節から成る名詞句の、内容節と主要部名詞 (head noun) の冠詞とがどのように関連しているか、という問題である。この問題を論じるにあたって、次の三つの言語事実を取り扱う。

第一は、Hawkins (1978) で指摘された言語事実である。それによれば、話し手が、たとえば (2):

- (2)a. London has been buzzing with the rumour.
- b. London has been buzzing with the rumour that the Prime Minister is going to resign.

の各文を聞き手に向かって話すとき、もしも聞き手の側で、話し手が言っている the rumour ないしは the rumour that the Prime Minister is going to resign が具体的に何を指しているのか分かる状況では、両者の間のコミュニケーションには問題となることは何も起こらない。これに対して、もしも聞き手が初めて聞いたために、それらが何を指しているのか分からない状況で言われた場合は、(2)a については問題が起こる。(2)a の場合には、聞き手が、「そのうわさとは、いっ

たい何のうわさのことをなのか」とか「どのうわさのことなのか」と話し手に聞き返すことが起こり、そのことによって円滑なコミュニケーションの流れが断ち切られてしまう。しかし(2)bの場合には、そういう事態は発生しない。この違いは、どのような理由によってもたらされると説明することが出来るのであろうか。

第二の言語事実、同じく Hawking (1978) が指摘したもので、主要部名詞の冠詞の選択に関することである。(3)(4):

(3)a. Bill is amazed by the fact that there is so much life on earth.

b. *Bill is amazed by a fact that there is so much life on earth.

(4)a. London is buzzing with the rumour that the Prime Minister is going to resign. =(2)a.

b. Fleet Street has been buzzing with a rumour that the Prime Minister is going to resign.

で明らかなように、fact という語が、主要部名詞としてその内容節を伴って現れるときには、その冠詞は、かならず定冠詞でなければならないのに対して、rumour の場合には、可算名詞 (countable noun) が一般的にそうであるように、定冠詞・不定冠詞どちらとでも共起することができる。Hawking によれば、内容節を伴う名詞は、この点で二つのグループに別れるという⁽³⁾。この事実をどのように説明することができるのであろうか。また、もしも、二つのグループに別れるとしたら、そのグループを構成する語は、具体的にどうなるのであろうか。

第三として、ものの存在を述べる there 構文に関連する言語事実である。一般に、定名詞句は there 構文の意味上の主語の位置に現れることはできない。しかし、鈴木 (1977) は、修飾語句を伴うことによって初めて定冠詞の使用が可能になったとみなすことのできる定名詞句表現の特徴を論じる際に、(5):

(5)a. There's the possibility that the cost of products will be increasing.

b. There's the claim that there is not such a rule as raising.

c. There's the hope that this discovery will revolutionize surgery.

の用例を示し、内容節を伴う名詞句は、定名詞句でありながら、there 構文の意味上の主語として現れることができることを論証している。ところが、たとえば possibility という語につにていえば、(6) も可能である。

(6) There is a possibility that there is life on other planets.

(5)a と (6) の言語事実から、possibility は、内容節を伴っている場合は、不定名詞句としてでも、また定名詞句としてでも、there 構文の意味上の主語の位置に現れうる、ということになる。しかしこれは、普通のパターンではない。どのように普通のパターンから離れているのであろうか。

以上、内容節を伴う名詞句と冠詞の関係に関わる三つの言語事実とその問題点を述べてみた。次に、問題点の考察に入る。

3. 考 察

3. 1 まず、(2)a(2)bによって提起された問題にもどって考察をはじめることとする。問題を整理仕直して述べると、

内容節を伴うことができる名詞句が、(2)a の the rumour のように単独の定名詞句として使用されと、聞き手の側が話し手の意図する the rumour が何を指しているのか分からない事態が発生し、コミュニケーション上不都合が起こる状況、したがって、定名詞句を使うことが不適切な状況であっても、(2)b の the rumour that the Prime Minister is going to resign のように内容節を伴っていれば、定名詞句として現れることができる、のはどうしてか

ということである。

ここで、われわれが想定している状況について考察してみる。定冠詞の使用原則はおおまかにいって、「話し手・聞き手双方がすでに知っているものについて用いる」ということである⁽⁴⁾。とすれば、この使用原則に照らしてみたとき問題なのは、(2)a の the rumour ではなくて(2)b の the rumour that the Prime Minister is going to resign である。(2)b の定名詞句は、この原則に従って使用されていないことは明かであろう。

いっぽう、この状況は、聞き手にとっては初めてのもの、未知のものがコミュニケーションの場を導入される状況である。これはまさに、不定名詞句が使用されるにふさわしい状況であって、定名詞句にはむしろ不都合な状況である。別の述べ方をするなら、この状況は、(4)b に現れている a rumour that the Prime Minister is going to resign にこそふさわしい状況なのである⁽⁵⁾。にもかかわらず、どうして the rumour that the Prime Minister is going to resign という定名詞句が使用できるのであろうか。

Hawkins (1978) は、「話し手・聞き手双方がすでに知っているもの」でないもの、すなわち、聞き手にとっては未知のものについて用いられる定冠詞の用法に対して名称を設け、初出用法

(first-mention use) の the とした。以下、この用語を使って論考を続けることにする。

この初出用法自体は、基本的には、不定冠詞の用法であるということはすでに述べたとおりである。したがって、初出用法の the の特徴をまとめると、この the は、形式上は定冠詞でありながら、使用状況の上では不定冠詞と共通部分を持っているということである。この二つのある意味では相反する特徴が共存することをどのように説明することができるであろうか。

Hawkins (1978) は、このような初出用法の the がもつ特徴の二面性を、変形規則を援用することによってとらえようとした。その試みを手短にまとめると、彼は、たとえば (7)a は、いくつかの変形操作を経て (7)b から派生させようとする⁽⁶⁾。

(7)a. the fact that there is so much life on earth

b. that there is so much life on earth is a fact

Hawkins がこのような試みをする根拠をいくつか挙げていることはもちろんである。しかしながら、このような根拠の妥当性についての議論は、ここではしない。一つだけその理由を述べるとすれば、それは、Hawkins 流の変形規則の依って立つ文法モデルが、現在では完全に消滅してしまっているからである。したがって、初出用法の the がもつ特徴の二面性を説明するという課題は、いずれ、別の観点から行われなければならない。

その手始めとして、われわれは、聞き手の視点から定名詞表現について考察することにする。コミュニケーションの場で定名詞句が言われると、聞き手は定名詞句が指すものを捜し出す行為を始める。このような反応は、定冠詞の使用原則をふまえた当然の反応であり、また、もしこれが行われなければ、円滑なコミュニケーションを行うための前提が崩れてしまうので、聞き手がこれからのがれることはコミュニケーションの仕組みの上で出来ないようになっているのではないかと思われる。

ここに問題解決のヒントがあるように思われる。聞き手が定名詞句が指すものを捜し出し始めるということは、聞き手にとって定冠詞は「捜しなさい」という指示として働いていると考えることができよう⁽⁷⁾。そして、この結果、定名詞句の指すものを聞き手が捜し出すことに成功した場合、定冠詞の適切な使用が行われた、ということになるのではないかと思われる。定冠詞の適切な使用の上でカギを握っているのは聞き手なのである⁽⁸⁾。

このような視点から内容節を伴った定名詞句が言われた (2)b の場合を再検討してみることにする。(2)b が、われわれが想定している状況で言われたときであっても、コミュニケーション上の不都合は起こらないという事実は、どのようなことを示唆しているのであろうか。それは、不都合が起こらなかったわけだから、前述の「捜しなさい」という指示が、聞き手の側で有効に働いたと、考えざるをえない。それではどのようにして有効に働くことができたのであろうか。これは主要部

名詞の語彙特性と関係があるように思われる。

内容節を伴うことができる名詞は、その特性ゆえに、統語論の観点からだけではなく、意味論上も一つの自然クラスを構成していると考えたべきではないかと思われる。というのは、「内容節を伴うことができる」という指定が語彙特性としてあれば、(8):

- (8) In a 1991 file photo, the body of Vladimir Lenin lies at the Mausoleum of Lenin. Rumors have arisen that the body may be removed from the mausoleum in Moscow and buried in St. Petersburg.

における rumors に関する意味解釈が、後続の that 節と関連づけることで容易になるであろう。そしてこのような語彙特性に基づく関連づけが、初出用法の the を含む定冠詞の聞き手に対する指示が有効に機能する基盤になっているのではなかろうか。われわれは、次のようにことが運ぶと考える。聞き手が the rumour と言われた時点では、その指すものが不明であったとしても、そこに含まれている定冠詞の指示に従って「指すものを捜した」結果、当該の語彙特性が作用して、その内容節との関連づけに聞き手が成功する。そして、英語という言語は、そのような場合でも定冠詞の指示が全うされたと認定する⁽⁹⁾。

このように、聞き手の視点に立って定冠詞使用の適切条件を論ずるなら、初出用法の the のもつ特徴の二面性を、内容節を伴っていない単独の定名詞表現には起こらない事態が、内容節を伴うことによって起こるという言語事実⁽¹⁰⁾に則してとらえることが出来る。

以上の考察から、内容節を伴った定名詞表現、たとえば the rumour that the Prime Minister is going to resign は、a rumour that the Prime minister is going to resign 全体が定化した場合⁽¹¹⁾と、そのような定化とは無関係なかたちで存在するもの⁽¹²⁾との、少なくとも二種類の存在を認める必要があるという結論に達する。しかし、どちらの場合でも定冠詞の聞き手に対する指示機能は同じであり、どちらの場合もその指示が全うされている、といえよう。

3. 2 次に、(3)(4)に関する言語事実に含まれた問題について考察する。問題は、

内容節を伴っている名詞句の冠詞が、不定冠詞でも定冠詞でも選択可能なグループと、常に定冠詞しか選択を許さないグループとに別れるが、それはいかなる理由によるのか

ということである。Hawkins (1978) の用例を再度考察してみたい。

- (9)a. Bill is amazed by the fact that there is so much life on earth.

- b. *Bill is amazed by a fact that there is so much life on earth. =(3)
- (10)a. The philosophical aphasic came to the conclusion that language did not exist.
- b. *The philosophical aphasic came to a conclusion that language did not exist.
- (11)a. London is buzzing with the rumour that the Prime Minister is going to resign. =(4)a
- b. Fleet Street has been buzzing with a rumour that the Prime Minister is going to resign.

Hawkins は、定冠詞の選択しか許さないグループのメンバー（以下 fact グループと呼ぶ）として fact と conclusion の二つの語を、また定・不定どちらの冠詞の選択をも許すグループとして rumour（以下 rumor グループと呼ぶ）一語を挙げているのみである。内容説を伴うことが出来る名詞は、数多くあり、個々の語がどちらのグループへ属することになるかは、興味深い問題と思われる。しかしながら、その基準がどのようなものかについて、Hawkins 自身は、直接には何も論じていない。

それでは、二つのグループの間にどのような違いがあるのであろうか。明確なことは、fact グループには、(9)b (10)b から判るように、不定名詞句表現が出来ないということである。これは、前述したように可算名詞にみられる一般的パターンではない。そこには統語論的、意味論的あるいは語用論的な何らかの理由があると思われるが、残念ながらこの点に関しては、Hawkins と同様、論者の立場から一定の見解をまとめるというところには至っていない。したがって、この点は引き続き今後の研究課題とするが、その際考慮に入れておくべきであろうと思われる事項が二点あるので、それらを述べることにする。

まず第一に、繰り返しになるが fact グループには単数不定名詞句表現がない。そして、この特徴は、不可算名詞 (uncountable noun) の特徴であることに気がつくであろう。とすれば、fact グループに属する名詞は、内容節を伴っていないときには可算名詞として振る舞うが、内容節を伴っているとき、とりわけ初出用法の the のときは不可算名詞なのではないかと推測される。この不可算名詞化の推測が裏付けられるなら⁽¹³⁾、(9)b (10)b の言語事実が説明可能になるであろう。

単数形不定名詞表現がないという事実からさらに別の推測として、このグループには複数形名詞表現もない、という可能性が導き出されるとと思われる。事実、conclusion と fact には、(12):

- (12)a. *Bill is amazed by the facts that there is so much life on earth.
- b. *The philosophical aphasic came to the conclusions that language did not exist.

で明らかなように、複数形名詞表現は不可能である⁽¹⁴⁾。もしこれが確固たる事実であるとすれば、複数名詞表現が可能であるかどうかを利用して、当該の語がどちらのグループに属するのか証拠に基づいて分類することが出来るようになる。これは実例によって確かめることがという点で便利な分類基準に成りうると思われる。

3. 3 最後に、初出用法の定名詞句と there 構文との関係について考察する。問題は、

内容節を伴っている定名詞句がなぜ存在を表す there 構文の意味上の主語の位置に現れることが出来るのか。また、内容節を伴うことが出来るある語について、定名詞句表現と不定名詞句表現のどちらも可能で、どちらも there 構文の意味上の主語の位置に現れることが出来るとしたら、両者は意味解釈上どのように異なるのか

ということである。まず確認しておくことは、この問題領域に含まれるのは、内容節を伴っている定名詞句表現すべてではない、ということである。内容節を伴う定名詞表現が話して聞き手双方がすでに知っていることを指している場合には、there 構文の意味上の主語の位置に現れることはできない。これは there 構文が定名詞句を排除する典型的状況であるからである。考察の対象になるのは、初出用法の定名詞句である。

われわれは 3. 1 で、初出用法の定名詞句が聞き手にとって未知のことについて用いられているにもかかわらず、定冠詞の使用条件は満たされていることを論じた。復習すると、定冠詞の使用条件が満たされるのは、一般的には、聞き手が定冠詞の指示、すなわち、「定名詞句が何を指しているのか探し出しなさい」という指示を受けて探し出し始めて、ある特定の指示物 (referent) を探し出すことに成功したときであるが、内容節を伴うことの出来る名詞については、その内容節を探し出すことが出来たときも、条件を満たしたことになる、と英語ではなっている、と考えた。この立場では、初出用法の定名詞句は、あくまでも定名詞句であって、不定名詞句の異形とか変形なのではない。まして、不定冠詞の意味を持つ定冠詞でもない。こうした考察を背景に、本稿は、この定名詞句が there 構文の主語の位置に現れることが出来る、と主張するのである。

there 構文の意味上の主語の条件は何かを論じるときは、この言語事実を踏まえなければならないのは当然であろう。そこで、不定名詞句と並んで初出用法の定名詞句もその条件を満たしているとする立場から条件を述べるとすれば、

(13) there 構文の主語条件

存在を表す there 構文の意味上の主語の位置に現れることができるのは、聞き手にとって未知のものを表す名詞句である

ということになろうと思われる。3. 3におけるここまでの議論のポイントは、要するに、初出用法の the は、既知のものに用いられる the と同じ定冠詞であるという認識をしておいて、その上で、there 構文の主語条件 (13) を使って (14):

- (14)a. There's the possibility that the cost of products will be increasing.
- b. There's the claim that there is not such a rule as raising.
- c. There's the hope that this discovery will revolutionize surgery. =(5)

の各文の存在を説明する、という点にある。

ここまで考察した限りでは、初出用法の定名詞句は、there 構文の主語として十分に適格であるとして扱うことになる。しかし、はたしてこれで何も問題がないのであろうか。板垣 (1982) はこの点に疑問を呈している。その論点を要約すると以下のようになる。

初出用法の定名詞句はそれ自体で、聞き手にとって未知のものを談話に導入する働きをする。そのような定名詞句を、あえて、there 構文の主語に据えて談話に導入する必要があるのか。もしかしたら、存在を表す there 構文とは種類を異にするのではないであろうか。

この疑問を補強するのは (14):

- (15)a. There is a possibility that there is life on other planets. =(6)
- b. There is a probability that our school will close a week earlier than usual.
- c. There is a rumour that the Prime Minister is going to resign.

ような用例の存在である。(15) の各文はいずれも普通の there 構文の意味解釈をもっている。これと並んで (14) が存在するというからには (14) には (15) とは違う、何か特別の存在理由がなければならないであろう。

(14) のような初出用法の定名詞句を意味上の主語とする文については、いろいろな角度からその特殊性を論じる必要があると思われるが、一つ指摘しておきたいのは、それらが用いられる状況はかなり限定されている、という点で (15) とは異なる、ということである⁽¹⁵⁾。たとえば、(14)a は、いろいろな可能性を議論しているときに、「製品コストが上がるという可能性もあるのだ (だからそれも検討する必要がある・・・)」というような意味あいでもちいられる。

この観察が、われわれが考察した初出用法の定名詞句がはたす役割とどの程度整合しうるのかは現在のところ不明である。繰り返しになるが、(14) のような初出用法の定名詞句を意味上の主語とする文については、いろいろな角度からその特殊性を考察し論じる必要がある。今後の課題としたい。

4. むすび

本稿では、内容節を伴う名詞句と冠詞の関連を、(i) 定冠詞の使用条件、(ii) 定・不定冠詞の選択、(iii) there 構文の意味上の主語、の三つの視点から考察した。そして、内容節を伴っている定名詞句は、初出用法の the を含む場合であっても、それは既知のものに用いられる普通の the と同じであること、初出用法の定名詞句は、内容節を伴わないときには可算名詞であっても、内容節を伴っているときは非可算名詞化している可能性があること、初出用法の定名詞句が there 構文の意味上の主語の位置に現れるのは、あくまでも定名詞句としてであること、しかし、その場合は、不定名詞句を主語にしている there 構文とは異なる使用状況があると考えなければならないこと、を論じた。

注

- (1) ここでは、「内容節」を、(1)に挙げたような that に導かれた節のみに限定する。
- (2) 用例の出典は、煩雑さを避けるために必要と思われる場合以外は特に記さないが、すべて論者が集めたものである。
- (3) Hawkins は、(3)a,b とは逆のケース、すなわち、つねに不定冠詞しか選択しないケースが存在するかどうかについては、何も論じていない。もしも、このような事例があるとすれば、当然、これも説明すべき項目に含まれることになるだろう。しかし、論者自身もこのような事例を知らないので、考察の対象にはしない。
- (4) この見解は、多くの文法学者が唱えている。あえて二つだけ文献を挙げるとすれば、安井 (1982)、Jespersen (1933)
- (5) この状況下で a rumour that the Prime Minister is going to resign が使用できることは当然である。
- (6) cf. Hawkins (1978) p.142
- (7) cf. Grannis (1972) p.283, 安井 (1978) p.206
- (8) cf. 安井 (1978) p.206
- (9) Halliday and Hasan (1976) における cataphoric という概念が適格である。
- (10) このことは、従来の定冠詞使用原則に修正が必要なことも示唆している。
- (11) これが定冠詞の一般的な使用原則にかなっているほう、である。
- (12) これが初出用法の定名詞句である。
- (13) (9)a (10)a の文について、英語を母国語する J. Simmons 氏 (東北大学講師) に尋ねてみたところ、fact も conclusion も非加算名詞かもしれない、という印象を述べられた。

- (14) この用例は、論者が Hawkins (1978) の用例に手を加えて、J. Simmons 氏に判断を仰いだ。
- (15) J. Simmons 氏との意見交換をまとめたものである。

References

- Grannis, O. (1972) "The Definite Article Conspiracy in English," *Language Learning*, 22
- Halliday, M.A.K., and R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman:London
- Hawkins, J. (1978) *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. Croom Helm:London
- 板垣完一 (1982) 「後方照応的定名詞句について」、『英語学論考』No.1
- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*. Unwin:London
- 鈴木英一 (1977) 「存在文の意味上の主語と定性・不定性」『山形大学紀要 (人文科学)』第8巻第4号
- 安井 稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』大修館:東京
- (1982) 『英文法総覧』開拓社:東京

Some remarks on the relation between the Article and the NP-complement in English

Kanichi Itagaki

We limit our discussion to the type of NP in English whose internal structure is Article + Noun + NP-complement where NP-complement works as the content clause of the preceding Noun. We discuss three problems concerning the relation between the Article and NP-complement within that NP construction.

First, we are concerned with the 'first-mention use' of the extensively discussed by Hawkins (1978) trying to make this concept clearer and argue that this use of the is not different from its basic use.

Second, we discuss why the sentence Bill is amazed by a fact that there is so much life on earth is not acceptable while the sentence Bill is amazed by the fact that there is so much life on earth is good and present our speculation that this might be attributable to the uncountability of the head noun of the NP under discussion.

Third we focus on the existential there-construction whose notional subject is the NP of the 'first-mention use' and argue that this type of sentence poses us an explanatory problem because we have another type of existential there-construction whose notional subject is an indefinite NP.